

巻頭言

日本のプレゼンス



葛岡英明
筑波大学

1. 国際会議における日本のプレゼンス

私が CSCW (Computer Supported Cooperative Work) という分野の研究を始めてから 20 年以上経つが、最近では関連する国際会議の委員を依頼されることが多くなってきた。そうして気がつくのは、この分野のプレミア国際会議に日本から採録される論文が少ないことと、それと比例するようにして、こうした国際会議の委員に占める日本人の割合も少ないということである。それでも少し前までは、他のアジア諸国における CSCW 研究はあまり活発ではなかったため、日本がアジア地域を代表していたと言っても良いだろう。しかし最近では、中国やその他アジア諸国の学術活動が活発になり、論文発表件数や委員の数が増えているため、日本のプレゼンスは相対的に低下していると言わざるを得ない。これは CSCW に限らず、HCI (Human Computer Interaction) 系のプレミア国際会議全般に言えることではないだろうか。国際会議のプログラム委員会などに出席し、こうした状況を見るたびに、何とかしなければいけないと思うのである。

我々がプレゼンスを高める一つの方法は、研究成果を論文にして、世界の舞台で発表することである。しかし我々日本人は、どうやら自分たちの研究成果をきちんと説明することが不得意なようである。あるいは、技術開発に注目するあまり、説明することを怠ってきた様な気がする。

2. 逆ギレ

私がまだ博士課程の学生だったときに、ある著名な研究者に「世界に出なければだめだ」「一流の国際会議

に投稿しなさい」とアドバイスをいただいた。それ以来 CSCW におけるプレミア国際会議と言われている ACM の CSCW や CHI 等への投稿を続けてきた。しかし、そもそもこれらの会議の採録率は 25% 以下であり、そう簡単には採録してもらえないのが現状である。

国際会議の査読で落とされると、やはりがっかりするのだが、自信を持って投稿した論文の場合は逆に腹が立ったりもする。こうしたときに我々が良く使う言い訳は、「この会議は査読者が悪い」、「欧米人は英語が得意なのだからずるい」等々であり、挙げ句の果ては「最近あの会議はつまらない」、「自分の論文を落とすあんな国際会議には二度と投稿しない」などと逆ギレしてみるのである。しかしそういう言い訳をして、会議そのものに責任を押しつけると、何かしらむなしさが残る。むしろ、我々の論文の書き方に問題があるのではないだろうか、とも思うのである。

3. 日本の投稿論文の傾向

国際会議のプログラム委員を引き受けると、10 本前後の論文を査読して、採否を検討することになる。かれこれ 10 年以上もそうした仕事をしていると、徐々に日本の投稿論文と欧米の投稿論文の違いが見えてくる。

日本の研究は、概して技術的な側面は高度であったり斬新であったりする。ところが投稿された論文には、以下の問題が見られることが多い。

- なぜその研究が必要なのか、なぜそうしたデザインチョイスをしたのかということが理論立てて説明されていない。

- 研究によってどのような知見が得られて、それが研究分野（他の研究者）にどのような貢献をするのかが説明されていない。

論文の基本であるこれらの要素がきちんと説明されていなければ、少々技術的に新しくても、採録されることは難しいと言わざるを得ない。

これは、非常に残念なことと思う。というのも、採録されている欧米の論文の中には、上記2点の説明は上手であるが、提案されているシステムはさほど新規的ではないものも多く見られるからである。これが我々がその国際会議に対して「だめだ」、「面白くない」と言いたくなる原因の一つであることは間違いない。

しかし我々は逆ギレで終わって良いのだろうか。我々は採録された論文がどのように上手に説明をしているのかということにもっと注目して、その方法を学び、我々自身もきちんと説明する努力をすべきなのではないだろうか。

4. デモ重視の傾向

日本の HCI コミュニティでは、新規技術や、アート、スポーツ、エンタテインメントなどに対する技術の応用のような、デモンストレーション的な研究が目され、デモ重視の傾向が年々強まっている。デモ重視の方向性を否定するつもりはないが、国内学会のデモセッションで発表されている研究成果の中には、学術的な意義がまったく説明されていない研究も多く見られ、多くの研究者がその問題点を指摘しているところである。

もし、日本の HCI コミュニティにおけるデモ重視の姿勢が、研究を文章で説明することを回避する傾向を助長していたら、そしてそれが日本の若手研究者の論文執筆能力を低下させ、日本の HCI 研究が世界から乖離していく要因となっているとしたら、悲しむべきことではないだろうか。

5. 文章で説明すること

私たち日本の HCI 研究者は、自分たちの研究の意義を文章で説明することをもっと真剣に考えなければならないのだと思う。私たちが研究を発表する意義は、その成果を一般化することによって、それが研究分野に対してどのような貢献をするのかを明らかにすること、すなわち他の研究者がその研究成果をどのようにして利用できるのかを明らかにすることである。私たちはこのことについてもっと真剣に考え、文章化する努力をすべきではないだろうか。そして、それを一流の国際会議で積極的に発表するべきではないだろうか。

ここで念のために申し上げておきたいのだが、既存のいわゆるプレミア国際会議に迎合して、それに論文を採録されるように書かなければならないと主張しているのではない。既存の国際会議の中で新しい方向性を打ち出すこともできるだろうし、新しい国際会議を立ち上げて世界にアピールする方法もあるのだと思う。

私も研究者としてはとくに年配の部類に入っており、今さら自分の文章力を向上させることはできないかもしれない。そうであれば、世界で活躍できるような若手研究者を育成するための方策を考える責任があるとも感じている。今回は、この場を借りて日々考えていることを紹介させていただいた次第である。

【略歴】

葛岡英明 (KUZUOKA Hideaki)

筑波大学 システム情報工学研究科 教授

1992年東京大学大学院工学系研究科情報工学専攻博士課程修了。同年筑波大学構造工学系講師、2006年より現職。国際会議関連では ACM CSCW の Associate Chair 等ならびに Steering Committee Member, ACM/IEEE HRI, ACM ICIC, ECSCW の Program Committee 等を務めている。